2）しかし，片貝に港湾が完成することにより九十九里平野の漁業が，この地域に集中的に発展するものと思われる。又天然ガスの利用，東京への近距離，工場誘致に積極的であることなどを考えると，今後工業もかなり進められると思われ，この地域の産業構造は近い将来に変ってゆくものと思われる。

3）地形的に，きわめて低平であって，平野内に砂堆と堤間低地が海岸線にほぼ平行して交互に走っている。平野内でも調査地域中心とした地域では列状配列が最も顕著である。

4）地形と土地利用とが非常に密接な関係にあり，地形の差異がはっきりと土地利用上にあらわれている。即ち砂堆：畑地，平地林・集落に，堤間低地，谷底平地：水田に利用されている。

5）この地域の農家は，田と畑を兼営し，経営方式は，田：水稲一毛作，畑：夏作として落花生，甘藷，冬作として小麦，大麦（夏作，冬作各々の二者の割合は，年により非常に変化が激しい）を栽培し，他に自給用として種々の作物を栽培している。この地域内のほとんどすべての農家が画一的にこの様な経営を行っているが，こゝ数年来園芸作物の栽培が行なわれる様になったが，園芸作物を栽培する農家は1割弱にすぎない。この地域の農業の中心は米作にある。

6）東京に近距離の位置にあること，自然條件にめぐまれていること，両総用水事業の進行，農業技術の進歩等によって農業が近年非常に変化している。農業の変化は，園芸作物の普及，有畜化，機械化，兼業農家の増加，反当収量の増加，離村者の増加（農業労働力の不足），一農家の耕地の増加などの点に見られる。

那珂川下流南岸の地形と土地利用

―地方都市隣接地域の農業地理的考察―

渡辺正江

このテーマと取り組んだ数ケ月の調査研究の総決算として，又形のない時から卒論という仰々しい名目を頂かざるを得なかった調査の成果としては，自分ながらあわれみを禁じ得ない。しかしからみあった糸からやっと無器用に一本のつなぎ目だらけの糸を引き出すに似た感慨が，一つの報文を完成？した後の，いささか虚脱状態の私のなかに一つの慰めとなって残っている。

生来の消化不良を今更責める気にもならないが，命題の諸検討とか研究方法については早くから，先生方の様々の示唆をいただき，真先にその中に調

査の指針を見い出し、要領を心得るのが当然であったが、実感としてそうできたのは〝何でもよいから〟式にかなりの資料を集めてから趣ろに気がついたのであった。又それらがいかに確定的なこととされていても，希望的観測の域を出るものではなく，裏付けられるべき線ではなく，考察の基準的役割しか演じ得ないものとしなければならないことを知ったのも甚々難かつた様に思われる。当然のこととして理解したつもりでいてもなかなか実用できないものである。

従来有機体として考えられている地域構造の諸事象の表われなどの検討や地域的命題の発見といった事柄が，現在自分が行なっている操作の全容であることを知ってはじめて幼稚ながら地理学的研究の困難にして複雑なことを悟った次第である。

取り扱ったテーマの領域は自分には際限なく広範に思えて要旨を述べることは不可能に近いので，次に感想的に述べてみる。

農業の経済的，地域的発展という点から茨城県は，発展的可能性を残し過ぎているといっても過言でないと推察されるが，調査地域は那珂川下流の水田卓越地帯であり，水戸、勝田両市をはじめとする地方都市隣接地域であるなどの條件が地域構造の基底をなしていると考えられる。地域の傾向を極端化してみると，比較的中，上層農家が多く県及び地元の農業開発，農業経営の向上に積極的であるものと，新規労働力の他産業への吸収をはじめ，転業などによる兼業化によっていわば農業開発、経営の向上に足踏み的なものとの二つが把えられる。階層的にみて，農家の日雇の対象となっているものも無視できない。後者の傾向については専業農家60％という特異な農家構成を示す県全体と比較し，新規労働力の他県転出が著しくなったという最近の県の傾向を考慮に入れても，位置的影響の表われ、つまり概して在村型の農外就業形態をとる性格をもつということは明らかである。

新農基法の根底にある，経営の安定した農家の維持増進，小農の他産業への吸収という考え方に関して，調査地域の現象に一つの典型をみる様に思われる。

調査地域は低湿な河川下流域という〝きまり文句〟を遺憾がちに使わせる程自然堤防の発達が著しく、こゝに伝統的な白菜，午蒡をはじめとする蔬菜栽培が行われている。市に近接した広い自然堤防上に展開する蔬菜栽培は比較的安定的であるが，概して水田主体の農業経営の卓越する部分に於ては蔬菜栽培の投機性や，水田主体の作業体系からの規制を受け商品価値，市場性の面で新興産地との競合にあいむしろ後退的である。

水戸街道を通じて東京との自動車交通は活発化しているが蔬菜の出荷とは縁がない様である。一面の畑作地帯でもあり、労働力需要の Peak が画一的であり、機械力の導入をはじめ労働効率の高度化が最近急速に促進され畑地の陸田利用、畜産の導入など安定した農業経営に移行する傾向が表われている。

従って蔬菜栽培に対する土地条件の有利性が今後どの程度まで積極的に利用されるかは予測しがたい。又、調査地域は東関東的という形容に該当する水田単作地であり、県全体の二毛作利用が早期栽培の普及と共に後退的であるという点から、従来の裏作利用に対する考え方 ― 麦、なたね作等では当地域においても二毛作化は余り考えられない。土地利用の変化についてはむしろ河成段丘及び台地面の軽鬆土畑地帯に於て、社会的要求に促された転換の可能性の方が大であろうと推察される。現在はこの土地を"野方"と呼び蔬菜栽培に関して"圷"に対し Complex を持ち概して甘藷 ― 麦の単純な輪作形式がとられている。

いずれにしても労働力需要の面で他産業との競合という社会的条件が様々の形で地域の農業的土地利用の発展的方向を規定するであることは否めない。今後の動向についてはあくまで将来の現実のみが答え得ることであり、私の推察可能な域ではないと痛感させられたのも調査地域の地理的條件の複雑さを物語るものでもあろう。まさに生の現実に接して時局に即して物を考えることができたのは私にすぎた業と云えるであろう。

巡　検　記

富　岡　巡　検

4年（昭和34年度生）

「式先生の巡検は大変よ、相当下調べしていかないと夜寝かせてもらえない事になるわよ」と上級生から有難いご注告を受けてはいたのだが、皆試験中の緊張がぬけたせいで毎日ボーッと過してしまい、一、二の勉強家を除いてはその前日迄研究室に現われる者がなく、多いに先生を嘆かせた私達ではあった。

それでも当日は持ちまえの心臓で11人が参加、それに先輩の鈴木さんが加わった。11時08分高崎着、駅前に横づけされた県のマイクロバスで先